

# 蝶の博物詩

## 生態17

### 擬態3



タテハモドキ  
(2005年3月8日 石垣島)

photo by

Nishiyama



ヒメウラナミジャノメ  
(1994年6月3日 戸隠)

## 蝶の博物詩

### 生態17

#### 擬態3

葉上で休む蝶を啄もうと、鳥が飛びかかったとき、突然上げた蝶の翅に、大きな蛇の目模様が現れたならば、鳥は一瞬ひるむに違いない。その蝶は難をのがれて飛び去る、という光景は想像がつくが、野外で実際にみたことはない。

鳥は本能的に蛇を嫌う。かつて、ムクドリ、ヒヨドリ、ハトなどの騒音や糞害を防ぐ目的で、マンションのベランダに蛇の目模様を画いた風船を置くことが流行したが、どうも効果がなかったらしい。目玉を突然みせることが肝要であり、しかも利口な鳥はすぐに学習するからである。

私も蛇が大嫌いである。1年に一度、隣りの教会の裏から寺の墓地まで、わが家の庭を無断で通過するアオダイショウをみた後、1週間くらいは庭に出られなくなる。昔、東大医局の先輩の森眞章先生から大作「蛇類図鑑」をいただいたことがある。素晴らしい著書とわかったが、二度と開くことはなく、本棚の隅で埃をかぶっている。なぜ、皮膚科医が蛇の本を、と思うが、先生の祖父の森鷗外に“蛇”という小説があったことに気がついた。なお森眞章は森Max(マクス)と読む。

蝶の目玉模様が鳥に対して本当に威嚇効果があるかどうか疑問が残るが、擬態の種類では警告型といわれる。図のタテハモドキのほか、クジャクチョウ(本誌17巻8号)、コジャノメ、オオヒカゲ、クロコノマチョウなども大きな目玉模様をもっている。日本にはいないが南米のフクロウチョウの後翅裏面の巨大な目玉模様はフクロウと酷似する。

蛇との類似性は蝶(成虫)よりは、鳥に狙われやすい幼虫のほうが顕著である。有名なのはアゲハチョウの幼虫で、小さいときは鳥の糞のような黒色であるが、終齢幼虫は全体がミカンの葉に似た緑色となり、頭のような部分(実際は胸部)に目玉模様がある。よくみると白い線が縦の瞳孔のようで、蛇の目にそっくりである。円い瞳孔には慣れているが、白い、縦に細い瞳孔はこわい。

さらに蛇に似るものはギョボクの葉にいるツマベニチョウの幼虫である。沖縄の青い空を背景に、赤いハイビスカスで蜜を吸う成虫(蝶)が、このおぞましい幼虫の変化(へんげ)とは俄かには信じがたい。

同じ目玉模様でも、多数並んでいる場合は警告より別の意味があるらしい。写真のヒメウラナミジャノメのように、後翅裏面の外縁に沿って、小さな眼状紋がきれいに並んでいる蝶のグループはジャノメチョウ科といい、ヒメジャノメ、コジャノメのごとく、小型のものが多く、これらの目玉模様は“そらし型の擬態”(見せかけの眼)と呼ばれる。すなわち、小鳥が虫を襲うときには眼を狙う習性があり、蝶は後翅の一部を鳥に与えて、肝心の頭部を守り、難をのがれるという説である。

西山茂夫